

第3節 (教材4-3) 医学の進歩を支えた人々 — 「解体新書」の陰に

〔教材4-3〕「医学の進歩を支えた人々」を学習するにあたって

『解体新書』がつくられる過程は、『蘭学事始』に詳しく記されています。杉田玄白、中川淳庵、前野良沢らが、オランダ語の解剖書『ターヘル・アナトミア』を『解体新書』として翻訳するにあたって、1771年(明和8年)3月4日、江戸千住小塚原でおこなわれた腑分け(解剖)を見学したことが大きかったことは知られています。

そのとき誰が腑分けをしたかはあまり知られていません。しかし、当時の医師には人体解剖の技術はほとんどなく、死に対するけがれ意識から解剖はせず、実際はえた身分の人が執刀し医師たちに指し示したのです。これまで、ともすればえた身分の人が腑分けをおこなったことは軽視されてきました。玄白の記述にあるように、虎松は、腑分けの巧者として知られていました。虎松の祖父である『老屠^{ろうと}』もまた、経験豊かな名手であったことは、解剖の様子からも分かります。

腑分けには医学の知識とともに高度の技術を身に付ける必要があり、死牛馬の解体を受け持たされていたことから腑分けに精通していました。様々な工夫や努力をして優れた医療技術を身に付け、人々の生活を支えるとともに日本の近代医学の発展に大きな業績を果たしました。

近年、このように賤視されていた人たちの、日本文化への貢献を、丹念に明らかにしていく研究も進められています。部落史学習では、被差別民衆の生活・経済・文化・政治などの面の向上が、その背景にあったことに気づかせていき、被差別民衆の生産と労働における活躍を具体的に理解させる必要があります。被差別部落をはじめ被差別民衆の史料の掘り起こしを進めながら、歴史を捉え直すことが行われています。

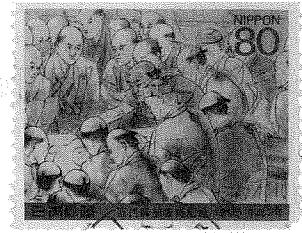
ここでは、次ページ以下にてこのような場面を読み合わせ、当時差別されていた人々の医学の進歩に果たした貢献について学びます。

参考文献

- ◇ 『身分差別社会の真実』 斎藤洋一・大石慎三郎著 (講談社現代新書 講談社1995年)
- ◇ 『部落史発見』 福岡市同和教育研究会 (1998年) 「解体新書」扉絵
- ◇ 『江戸の非人』 本田豊著 (三一書房 1992年)
- ◇ 『なかまとともに』 (前出) 「五、部落と人権の歴史」

【教材4-3】医学の進歩を支えた人々『解体新書の陰に』

1771年（明和8年）杉田玄白は、オランダ語で書かれた解剖書が今まで学んだ日本や中国の医学書と違う内蔵や骨格の図を見て、それが本当か確かめたいと考えていました。すると、町奉行所から「骨が原」（現在の東京都荒川区小塚原）の刑場で、腑分け（人体の解剖）があると知らせが届きます。京都生まれの50歳ばかりの女が大罪で処刑され、その処刑場に西洋医学に関心を持つ医師たち杉田玄白、中川淳庵、前野良沢らと誘いあって骨が原に段取りしてあった解剖の見学の間へやってきました。



（1995年 郵政省発行
近代解剖教育記念切手
「腑分け」前田青邨作）

一、これより各々打連れ立ちて骨ヶ原の設け置きし観臓へ至れり。さて、腑分のことは、えたの虎松といへるもの、このことの巧者のよしにて、かねて約し置きしよし。この日もその者に刀を下さすべしと定めたるに、その日、その者俄に病気のよしにて、その祖父なりといふ老屠、齢九十歳なりといへる者、代りとして出でたり。健かなる老者なりき。彼奴は、若きより腑分は度々手につけ、数人を解きたりと語りぬ。その日より前迄の腑分といへるは、えたに任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは肝なり、腎なりと切り分け示せりとなり。それを行き視し人々看過して帰り、われわれは直に内景(一)を見究めしなどいひしまでのことにてありしとなり。もとより臓腑にその名の書き記しあるものならねば、屠者の指し示すを視て落着せしこと、その頃までのならひなるよしなり。その日もかの老屠がかれのこれのと指し示し、心、肝、胆、胃の外にその名のなきものをさして、名は知らねども、おのれ若きより数人を手につけ解き分けしに、何れの腹内を見てもこゝにかやうの物あり、かしこにこの物ありと示し見せたり。図によりて考ふれば、後に分明を得し動血脈の二幹また小腎(二)などにてありたり。老屠また曰く、只今まで腑分のたびにその医師がたに品々をさし示したれども、誰一人某は何、此は何々なりと疑はれ候 御方もなかりしといへり。良沢と相ともに携へ行きし和蘭図に照らし合せ見しに、一としてその図に聊か違ふことなき品々なり。古来医経に説きたるところの、肺の六葉 兩耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異なり。官医岡田養仙老(三)、藤本立泉老(四)などはその頃まで七八度も腑分し給ひしよしなれども、みな千古の説と違ひしゆゑ、毎度毎度疑惑して不審開けず。その度々異状と見えしものを写し置かれ、つらつら思へば華夷人物違ひありやなど著述せられし書を見たることもありしは、これがためなるべし。さて、その日の解剖こと終り、とてものことに骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨どもを拾ひとりて、かずかず見しに、これまた旧説とは相違にして、たゞ和蘭図に差へるところなきに、みな人驚嘆せるのみなり。

その日の刑屍は、五十歳ばかりの老婦にて、大罪を犯せし者のよし。もと京都生れにて、あだ名を青茶婆と呼ばれしものとぞ。

一、帰路は、良沢、淳庵と、翁と、三人同行なり。途中にて語り合ひしは、さてさて今日の実験、一々驚き入る。且つこれまで心付かざるは恥づべきことなり。苟くも医の業を以て互ひに主君に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形態の真形をも知らず、今まで一日一日とこの業を勤め来りしは面目もなき次第なり。なにとぞ、この実験に本づき、大凡にも身体の真理を弁へて医をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申訳もあるべしと、共々嘆息せり。良沢もげに尤も千万、同情のことなりと感じぬ。その時、翁、申せしは、何とぞこのターヘル・アナトミアの一部、新たに翻訳せば、身体内外のこと分明を得、今日治療の上の大益あるべし、(後略)

註 (一) 内景—内部構造。(二) 小腎—副腎。(三) 岡田養仙—1722~1797。

(四) 藤本立泉—立泉は玄泉 (1703~1769) か。

(杉田玄白『蘭学事始』岩波文庫 P34~P37)

差別された人々が果たした大きな役割

歴史を学習するとき、ともすると業績をあげた人物にだけ目が奪われ、その事実を見誤ることがあります。前記のような事実は、玄白自身がきちんと書き残しています。(その意味で、事実をまげない科学者らしい態度と言えます) 玄白たちの偉大な功績も、当時差別されていた人々に支えられていた事実を、しっかり見る必要があります。

医者である玄白たちも、死に対する「けがれ」意識にとらわれ、解剖はしなかったのです。それをした「えた」身分の人々は、医学、薬学の知識を得て、日本医学の発展を支えていたという事実を、正當に評価し、伝えていく必要があります。

「同和教育だより第48号」(平成8年4月 長野県教育委員会)

◇さらに興味のある人は次のような本を読んでみよう

- 『身分差別社会の真実』齋藤洋一・大石慎三郎 講談社現代新書 講談社 (1995年)
- 『部落史がおもしろい』渡辺俊雄 解放出版 (1996年)
- 『続 部落史の再発見』 // 解放出版 (1999年)
- 『江戸の非人』本田 豊 三一書房 (1992年)

◇発展資料

- VTR「誇りうる部落の歴史」長野県同和教育推進協議会 1994年 30分
- VTR「日本の歴史・江戸時代の学問」(ASUKA)

杉田玄白と『解体新書』



小学校の教科書で紹介されている「かいぼうの見学（想像図）」（東京書籍「新編 新しい社会6上」から）なお、この教科書の教師用指導書には、「蘭学事始」には、執刀する老人が、当時の近世部の人であったことが記されているが、この人々の医学に対するこのような貢献も指摘したい」と解説している。

一七七一（明和八年）、小浜藩（福井県）江戸屋敷の藩医であった杉田玄白は、医者仲間と同藩の中川淳庵に、オランダ語で書かれた解剖書を

見せてもらいました。玄白が、今までに学んだ日本や中国の医学書と、まるで

人体の解剖があるという知識が宿ります。玄白は、前野良沢（中津藩）大分県、中川淳庵たちと共に、骨が原に行き、解剖を見学しました。

そして、オランダ語の解剖書の正確さに大変驚き、また感動して帰ってきます。

興奮のさめやらぬ翌日から玄白たちは、この解剖書の翻訳に取りかかります。大変な苦勞を重ね、四年の歳月をかけ、一七七四年に、『解体新書』と名づけて出版しました。

その後の日本の医学、科学に大きな発展をもたらしたことは、よく知られていることです。

玄白たちのこの偉業は、

「ターヘル・アナトミア」の翻訳に取りかかります。大変な苦勞を重ね、四年の歳月をかけ、一七七四年に、『解体新書』と名づけて出版しました。

その後の日本の医学、科学に大きな発展をもたらしたことは、よく知られていることです。

解剖した人はだれであったか

さて、玄白は、八十三歳のとき、『蘭学事始』を著し、『解体新書』を翻訳したときのことなどを細かく回想

している。この中で、前述の腑分けを見学した日のことも、正確に述べています。

それにより、この日の腑分けは、「えた」身分の虎松が行うことになっていたのですが、急病で来れなくなつてしまつたようです。それで虎松に代わつて、九十歳になる虎松の祖父が来て腑分けをしました。

「これが心臓、これが肝臓」と説明しました。

その他、「名前前は知らないが、ここには必ずさういふものがある」と他の臓器も示したということ。

差別された人々が果たした大きな役割

歴史を学習するとき、ともすると業績をあげた人物にだけ目が奪われ、その真実を見誤ることがあります。

前記のような事実は、玄白自身がきちんと書き残しています。（その意味で、事実をまげない科学者らしい態度と言えます）

玄白たちの偉大な功績も、当時差別されていた人々に支

えられていた事実を、しっかりと見ることが必要です。

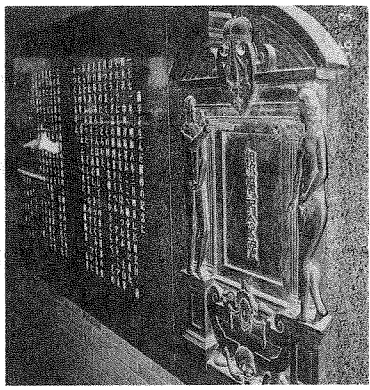
医者である玄白たちも、死に対する「けがれ」意識にとらわれ、解剖はしなかつたのです。

それをした「えた」身分の人々は、医学、薬学の知識を得て、日本医学の発展を支えていたという事実を、正当に評価し、伝えていくことが必要です。

「同じ人間である」という認識

玄白は、オランダの解剖図が本当かどうかを、自分の目で確かめてみるという科学的な態度を買きました。

こうした腑分けに対して、「死体を解剖しても何の役に立たない」となどの批判が浴びせられました。



小塚原回向院（東京都荒川区南十住）にある鏡廣記念碑「蘭学を生んだ解体の記念に」と題したこの碑文は、玄白らの功績を記しているが、執刀した老人のことには触れていない。